

主題 「学校・家庭・地域」が融合・連携した、通学合宿を始めるにあたり
～地域の一員として、社会教育施設の取り組み～

1 はじめに

現在、社会では少子化や核家族化が進み、また、TVゲーム・PCなどの普及により、地域の間人関係や地域の教育力の希薄化が問われている。そのために児童・生徒の心身の発達は著しく変化してきており、私たちの想像を超えた、事件も起きている。

また、完全学校週五日制の導入を背景として、家庭や地域で子どもを育てる機運を高めること、家庭や地域の教育力を高めること、生活体験・自然体験の充実により子どもの心を豊かに育むこと、地域社会で子どもたちの体験活動の充実を図ることなどの体制強化の必要性が急務であると言われている。

では、どのように児童・生徒に対し、取り組む必要があるかと考えてみると、教育は学校だけではなく、「学校と家庭と地域」の融合が重要であり、学社融合・連携で取り組むことが望まれる。

そこで、今回は「学校と家庭と地域」の三者が共同して取り組む事業を、地域の一員である群馬県立妙義少年自然の家（以下当所という）が中心となり、学校・家庭・地域の協力により、児童・生徒に必要な「生きる力」をつけることをねらいとし、本主題とした。

2 地域の立地

当所では、上記の課題解決に向けた事業の検討を、全国の先進事例等の情報収集を行うとともに開始した。幸い、当所の立地条件は妙義町立妙義小学校（以下「妙義小」という）から、約2キロという通学可能な場所に位置していることから、新たな試みとして、本県では、あまり事例のない学校と家庭と地域とが協力して行うことのできる「通学合宿」の実施に適していると考えたものである。

3 取り組みの経過

平成14年度より本事業の検討を進めてきた。

平成14年度実施経過

- 14年5月 平成15年度の事業検討「通学合宿」実施について発案
- 6月 資料収集・所内資料読み合わせ・検討
- 7月 「通学合宿」実施にむけて、素案検討所内会議
妙義小学校長へ素案により協力依頼・・・（別項にて詳細説明）
- 7月 妙義町教育委員会への協力依頼・・・
- 9月 「ボランティア団体」妙義アウトドアスタッフへの協力依頼
- 15年1月 PTA総会での説明会の依頼
- 2月 PTA総会での説明会資料作成・検討
- 3月 学校との説明会打ち合わせ・・・
PTA総会での説明会（PTA会員・教職員）35名参加
町教育委員会への経過報告、学校長と実行委員会及び事務局会議設立の打ち合わせ

平成15年度実施経過

- 4月 町教育委員会と実行委員会設立及び事務局会議の打ち合わせ
P T A 総会后「通学合宿にむけての講演会」14:30 ~ 15:30 参加者 55名
講演会実施 演題「学校と地域の教育力を結ぶ」
~通学合宿による体験活動を通して~講師「伊藤俊夫」先生
- 5月 実行委員委嘱依頼の準備
- 6月 学校長・P T A 会長・教育長への実行委員委嘱
第1回実行委員会の説明、実行委員委嘱・第1回実行委員会 . .
- 7月 児童対象説明会、参加に対するアンケート実施
- 8月 第1回事務局会議 日程・協力団体依頼について
第2回事務局会議、参加希望調査
- 9月 第3回事務局会議
保護者説明会、施設見学日、参加希望調査、協力団体への協力依頼
- 9月 第2回実行委員会
- 10月 参加希望保護者対象説明会・施設見学実施・追加参加希望調査
協力団体代表への説明会
実施前のアンケート実施・健康調査・習い事調査
- 11月 **24日~30日 通学合宿実施**
- 12月 実施後のアンケート実施・協力団体の代表をまじえた実行委員会による
反省・検討

4 計画の具体化

上記の取り組みを行ってきた。しかし、県内では、「学校と家庭と地域」の三者が共同して取り組む、通学合宿の企画は初めてであり、企画から実施に至るまで様々な理解と協力が必要となった。

そこで、上記の経過の中でいくつかの点に視点を当てて、具体的な取り組みについて、説明したい。

平成14年5月より所内指導課（社教主事）と所長との間で、平成15年度の事業検討「通学合宿」実施について発案に向けた検討を開始。7月の素案検討までに、資料収集・検討会議を数十回行い、素案を完成させ、妙義小学校長に協力依頼をした。学校長より、通学合宿について理解をいただき、来年度の実施に向け、大きなステップとなった。

平成14年7月、妙義町教委教育長に来年度通学合宿の実施について、素案とともに、妙義小との打ち合わせの結果を報告。教育長からも実施に向けた、よい返事をいただき、実施へ向けての第一歩を踏み出した。

妙義小との打ち合わせの中から、説明会の必要性が高まり、P T A 総会にて、時間をいただき、説明会を実施した。

（P T A 会員・教職員）35名参加

通学合宿にむけて、保護者対象に講演会を開催し、保護者への理解促進に努めた。

事業検討していく中で、家庭（保護者）、地域（ボランティア含む地元関係団体）、学校、妙義町教委、少年自然の家等の関係者により構成する実行委員会を設置し、事業の企画・運営等に

ついて、明確にした。(次の実施主体で具体的に説明)

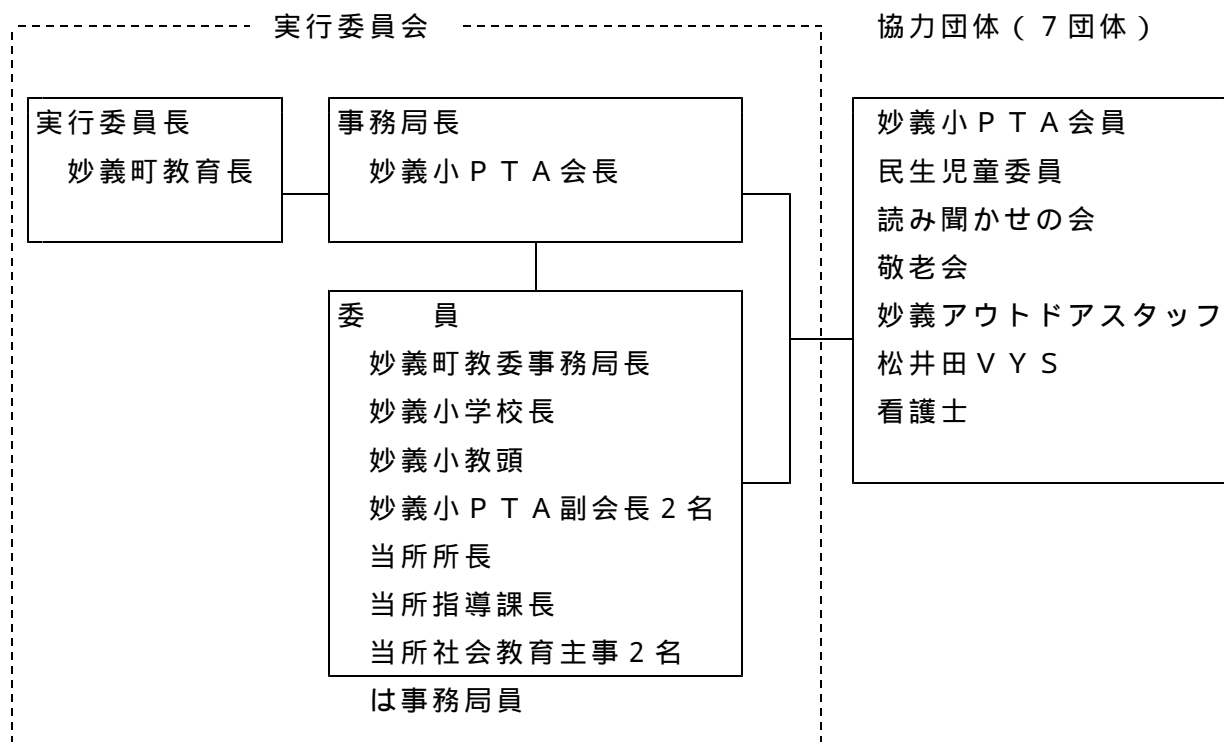
児童対象に、通学合宿の意味と内容の説明会を実施した。

学校、妙義町教委、少年自然の家の関係者は、家庭(保護者)、地域、(関係団体の関係者)が、自主的・主体的に取り組めるような支援や条件整備等に努めた。

保護者より、習い事の心配や生活面の心配などの意見がみられたため、事前に習い事調査や施設見学会を行い、通学合宿の理解を求めた。

5 実施主体

当所や学校が直接企画・実施するよりも、地域ぐるみで企画・実施することの方が効果的であると考え、自然のまなび家「妙義の^{しゅく}宿」～妙義少年自然の家通学合宿～実行委員会(以下「実行委員会」という)を組織し、企画から運営までを担当することとした。



6 ねらい

「生きる力」の育成

学校、家庭、地域社会との連携

家庭の大切さの認識

上記の3点をねらいとし、親元を離れた異年齢での共同宿泊生活により、食事の準備やあと片づけ、洗濯や清掃、班別活動やレクリエーションなど様々な体験活動をさせることにより、ねらいへの具現化を図る。

また、保護者や地域の人々、関係団体の人々が参画することで、子どもたちへの理解、家庭教育の大切さ、地域の人間関係の確立、地域の教育力の向上に向けた機運の醸成を図ることをねらいとした。

7 参加者

当初、1年生からの全校児童を対象としたが、参加アンケートにより3年生からが適当

であるという声が多く、妙義小全校児童103名の内、3年生から6年生の75名を対象として希望を募った結果、53名の参加となった。

8 要項・日程

別紙参照（要項や代表的な行事や活動をなどを抜粋したもの）

9 実践

- 1) 親元を離れた異年齢での共同宿泊生活により、食事の準備やあと片づけ、洗濯や清掃、班別活動やレクリエーションなど様々な体験活動をさせることによって「生きる力」の育成をねらいに、実践を行った。

また、子どもたち同士のコミュニケーションや共同性の育成の場、保護者への感謝の気持ちを表す場として、子どもたちで準備・運営する「さよなら集会」の実施を行った。集会は一部と二部に分け、一部では、カレーづくりと炊飯により会食を行い、二部では毎晩の班別活動で準備した劇や、ベニヤ板にペンキで一週間の生活を表した「大きな本」の披露となった。（日程の詳細は、別紙参照）

食事の準備



洗濯



清掃



班別活動



学習風景



就寝準備



さよなら集会

カレー作り



協力者・保護者との食事



大きな本



- 2) 地域とのコミュニケーションを大切にするため、敬老会や読み聞かせなど色々な方に協力を依頼した。

A 保護者の協力

家庭の教育力を高めるようとする観点から、PTA会長と副会長は実行委員として、24名の保護者により、就寝準備から起床までの夜間の協力を得た。

B 民生児童委員

PTAと同様に就寝準備から起床まで夜間の協力を得た。当初、妙義小校区の民生児童委員のみを予定したが、妙義町のもう一つの小学校である高田小校区の民生児童委員の協力も得られ、ねらいの広がりがみられた。

C 読み聞かせの会「いとでんわ」

読み聞かせの時間を就寝前として、会員の主体的な取り組みにより、シリーズ物で四晩の実施となった。子どもたちにとってシリーズ物の読み聞かせは大きな楽しみの一つであった。また、本の内容も友情をテーマにしたものであり、異年齢集団で協力して生活する場面にふさわしい内容であり、豊かな情操を育むことができた。



D 敬老会「福寿会」

地域の昔話と会食、下校の行程を一緒に歩いていただく協力を得た。福寿会の主体的な取り組みにより、全行程を子どもと一緒に歩くのは大変であることから、2キロの行程を3行程に分け交替で歩くこととなった。結果的により多くの人とかかわりがもてたことも成果であった。また、地域の昔話では、地域理解や文化の伝承からも大変有意義であった。



E 子ども育成会

ふだん通り慣れない道のため、1日3名、計12名の協力を得て、登校時の危険箇所についての交通指導を日替わりで行うことにより、地域を見守る体制作りができた。



F ボランティア団体「妙義アウトドアスタッフ(MOS)」

MOSは、当所の指導者研修会の参加者が主体的に会を発足し、当所を中核とした野外活動等のボランティア活動を実践している団体である。MOSには、班別活動や夜間を中心に、活動全般にわたる協力を得た。日ごろの実績もあり、協力者でありながら運営の一端を担う役割も果たし、ボランティアとしての見本となった。

G ボランティア団体「松井田VYS」

子どもたちの運営でキャンドルファイヤーを行い、レクリエーションの場を設けることで、身近な高校生が頑張る姿をみて、ボランティアへの意識の高揚を図ることができた。



H 看護師

当所のボランティアとして活躍している方や保護者の中で資格を持っている方の6名の協力により、夜間の健康管理やカウンセリングを行った。幸い大きな病気や

怪我がおこらず、子どもたちや保護者など関係者にとっての安堵感ははかりしれなかった。

3) 学校との連携

基本的な考えとして、学校生活も一週間の生活の一部であるにとらえ、学校職員も協力団体のひとつとした。しかし、子どもたちや保護者にとって、心のよりどころであるため、学校生活だけでなく夕食準備から夜の班別活動までの協力があり、児童たちの安心感は効果が絶大であった。また、学校と妙義少年自然の家との連携により、毎年実施している学校行事「クリーン作戦」と「全校野外炊飯」を取り込むことにより、学社連携の事業ができた。



10 成果と課題

この「通学合宿」は、地域初のところみであったため、子どもや保護者を対象としたアンケートや協力団体の意見・実行委員会での反省の結果、実施、時期、日程、準備、運営など様々な課題があげられた。

しかし、実行委員を含め、この通学合宿に関わった人は実210名の協力を得ることができた。これだけの人たちが関わっていただけたことは、今回のねらいの一つであった、地域との連携がうまくいった成果であると考ええる。

また、実行委員会により、企画・運営に全員であたり、多くの打ち合わせや実行委員会・事務局会議を設けたことが、それぞれの立場での考える活躍が、準備段階でみえていなかった部分の穴埋めとなり、子どもたちの活動の大きな支えとなった。特に保護者の立場でもあるPTA会長・副会長や学校長は、地域や協力団体の人たちとの架け橋として、大きな役割を果たした。

次に、児童の「生きる力」としての効果を、考えられる3点をあげる。

長期の宿泊体験であったが、全国的な実践例でも示されるよう、子どもたちの疲労は3日目から4日目がピークであり、共同生活や人間関係なども円滑にいかない面もみられたが、それを乗り越えて積極的な役割行動ができるようになった。

子どもたちの変容は、直接目にみえたもの、内面に秘められたものがあるが、ここでの体験は成長する過程の中で必ず、生きてはたらく大きな力となっていくことが実感できた。

子どもたち同士の異年齢集団により、上級生や下級生の学びあい、ふれあい、結びつきが深まり、子ども間の「生きる力」の育成になった。

次にアンケートによる成果をみってみる。(実施後の参加児童・保護者のアンケートより) 児童の感想の抜粋(成果)

- ・体験を生かして、これからは積極的にやっていきたい。
- ・家の人があんなに大変な家事を毎日しているなんてすごいと思った。
- ・他学年の友達ができ、協力して生活ができた、不安が不安じゃなくなった。

- ・みんなで入ったお風呂や寝たことが楽しかった。

保護者の感想の抜粋（成果）

- ・家庭と地域が本気になって、子どもを育てていくことが必要と感じた。
- ・我慢すること、協力すること、進んで何かをすることを学んだ。
- ・友達の和が育った、地域の方の協力がありがたい。
- ・子どもたちの顔が生き生きとし、「ありがとう」の一言が以前よりも多くなってきた。
- ・行動にすぐ変化があったわけではないようだが、心の中はかなりの変化があった。
- ・多くの方が関わって子どもを育てる大切さを知り、妙義町に住んでいる誇りを感じた。
- ・自分のことは自分でしようという気持ちが芽生えてきた。

以上の感想が得られたことは、「通学合宿」は、地域全体で取り組んだ過程に大きな価値があったことや「生きる力」の育成に、大きな役割を示せたと言える。

課題としては、色々な意見から「0からの計画」であったため、実行委員会の時間超過や子どもたちの日程時間の配分などがあげられる。実行委員で話し合いはたくさん行ったが、机上の計画であったため、実際に行ってみると色々な部分で改善点等が見えてきた。

次にアンケートによる課題をみってみる。（実施後の参加児童・保護者のアンケートより）

保護者の感想の抜粋（課題）

- ・開催時期や生活時間の設定を検討してほしい。
- ・準備で細かなことを前もって聞きたかった。
- ・子どもたちの時間として、ハイキング、カルタ、トランプがあれば良かった。

など、たくさんの意見をいただき、来年度に向けての課題も見えてきた。

しかし、児童の感想の中には、課題としての意見はみられず、楽しく参加できたようだ。

1 1 まとめ

以上、成果と課題から考えると、地域の教育力を高める観点、保護者・地域の人々、団体などのより広範な協力を得て推進したことが、協力する保護者、地域の方々にとっても、子どもたちをより深く理解する学習の場となり、地域で教育する大切さが広がった。

地域ぐるみの総合的な教育活動が、子どもたちに「生きる力」の育成への大きなステップとなったと考える。そして、学校、家庭、地域社会との関係が深まり、今言われている、学社融合・連携の必要性を再認識できた。

さらに、児童と保護者が1週間離れて生活をした後、対面した時の笑顔は「家庭の大切さ」が認識・実感できたのではないかと考える。

また、本所としても、今後の所運営に活用していける地域の人材を知ることができたことは大きかった。これらを基に、協力いただいた多くの人たちを宝として、次への大きな飛躍と、今後も「学校、家庭、地域」の学社融合・連携を推進していきたい。

{ 参考文献 }

- ・社会教育（財団法人 全日本社会教育連合会）
- ・平成13年度 社会教育実態調査（国立教育行政研究所社会教育実践研究センター）
地域における通学合宿活動の実態に関する調査研究
- ・平成13年度 『いしかり・子ども宿』（財団法人 青少年野外教育振興財団）